

## 中学校及び高等学校の部

### 優秀賞

#### 「真の優しさ」

沖縄県立開邦高等学校 2年 山本 瑚夏

ゴールデンウィークの時期は、観光客の数が多いと感じる。実際、テレビのニュースなどでも沖縄観光についての話題がよくとりあげられている。はたして、沖縄にどのような魅力を感じて観光客は来県するのだろうか。

私は、奈良県で生まれ幼いころにここ沖縄県に移住してきた。父、母ともに本土出身であり沖縄県に親戚は一人もいない。しかし、両親は移住する事を決断した。移住とはその土地で生涯暮らす事を意味する。その様な重大な決断を下した理由として、家族旅行で沖縄に訪れた事が大きい。私の両親は、旅行が好きでよく沖縄に来ていた。私の名前「瑚夏」の瑚は沖縄の珊瑚礁から名付けられている。だが、姉と私が生まれる前はまだ沖縄に移住する事は考えていなかったと、母は言う。初めて家族全員で沖縄に来た時、まだ幼い私を抱えた母を、市場のおばあ達がとても親切に手助けしてくれたという。都会で忙しく働いていた母にとって人に助けをもらうという感覚はとても新鮮であり、感動したという。私がこの沖縄に住んでいて感じる沖縄の魅力は「人の優しさ」だ。沖縄に来ている観光客の中にはこの「人の優しさ」に魅力を感じている人は多いはずだ。私はこの魅力、強みを活かす観光を沖縄県ならできると感じる。具体的に「人の優しさ」を感じられる観光とは何かと考えた時、バリアフリーという考えが浮かんだ。

沖縄県には電車がなく県民の足となるのは主にバスやタクシー、モノレールなどだ。私はよくバスに乗るのだが、最近ノンステップバスを見かける事が多くなったと感じる。ノンステップバスとは、バス車内に段差をなくした形のバ

すだ。しかし、どのバスにおいても車いすが乗れるスペースがないことに私は気づいた。県民全員が平等にバスに乗る権利があるのにもかかわらず、車いす利用者に全く配慮していないと感じた。沖縄に観光で訪れる人の中には、車いす利用者や障がい者が少なからずいるはずだ。私は、沖縄に来るすべての人にまた沖縄に来たいと感じてほしい。そのためには、観光という枠組みだけではなく弱者がより暮らしやすい社会づくりをすべきだ。バス停においても点字表記の時刻表設置や音声ガイド、車いす専用タクシーなど改善すべき点は多くある。誰にでも優しい町づくり、観光は「人の優しさ」を感じられる沖縄にしかできないと感じる。

次に、宿泊施設の問題だ。以前、新聞に介護を必要とする人達にとって旅行する事自体がとても難しいという話題が掲載されていた。つまり、旅行に来て介護する側の負担が大きい事が問題なのだ。介護する側もされる側も、十分にくつろぐためには宿泊施設のバリアフリー化が重要である。ヘルパーの常時待機や専属の栄養士などが望ましいと考える。しかし、現実問題として宿泊者の金銭面の負担が大きいのも事実だ。そこで県が、観光事業の一環として介護を必要とする観光客専用の宿泊施設を作るべきだと感じる。そうする事である程度、金銭面や身体面において負担が軽くなると考える。つまり、このような拠点施設を作る事で新たな観光産業の発展にもつながると考える。また、観光客にとってだけではなく県内に住む障がい者の憩いの場にもなる考える。

最後に、子ども達がもっと楽しめる観光だ。沖縄には首里城を代表として、多くの歴史的建造物がある。歴史を学ぶ事は子ども達にとって大切であり、また、私達も後世へ受け継がなくてはいけない。しかし、子ども達にとってそれらの内容を理解する事は難しくつまらない事が多々あると考える。そこでスマートフォンやタブレット端末を利用した沖縄県の遺跡やその歴史を学ぶ事ができるアプリを作るべきだと考える。それらのアプリは、子ども達にもわかりやすいようなアニメの制作や、簡単なクイズなどの工夫をする事でより楽しめる

だろう。また、小さな子どもを持つ母親のための主要観光施設における、託児保育場所を増やす事で、より家族全員で沖縄に来やすくなると感じる。

人と人の繋がりが軽薄となった現代において、日常生活で「人の優しさ」を感じる事は少なくなった。日常生活から一歩外れて、癒しを求めて沖縄に来る観光客に県民の、すべての人にたいする思いやりや気遣いが称賛されるような社会をつくりたいと思う。また、沖縄県がきっかけとなって、弱者が快適に旅行ができるような施設、交通機関の設置推進を日本全国で取り組むべきだと考える。そうする事で日常生活では気づく事ができない弱者の苦勞、悩みが認識できるようになるだろう。今こそ沖縄県民の「真の優しさ」を発揮すべきだ。